



TITLE:

ヴェトナム國民黨と雲南--滇越鐵路 と越境するナショナリズム

AUTHOR(S):

武内, 房司

CITATION:

武内, 房司. ヴェトナム國民黨と雲南--滇越鐵路と越境するナショナリズム. 東洋史研究 2010, 69(1): 92-122

ISSUE DATE:

2010-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/178116>

RIGHT:

ヴェトナム國民黨と雲南

——滇越鐵路と越境するナシヨナリズム——

武 内 房 司

はじめに

一 雲南のヴェトナム人コミュニティ

二 ヴェトナム國民黨雲南總支部の成立

(一) ヴェトナム光復會と雲南

(二) 雲南におけるヴェトナム國民黨

三 在中國「ヴェトナム國民黨」諸派と雲南總支部

(一) 在中國「ヴェトナム國民黨」諸派

(二) 在雲南ヴェトナム國民黨グループの再編

おわりに

はじめに

筆者はこれまで、雲南東南部からヴェトナム西北地域、いわゆるシブソンチャウタイと呼ばれる地域に居住するタイ族社會の地域變容、さらにはまた、雲南南部の鑛山開發、とりわけ近代に入り世界的に需用が増した錫の生産地として知られる箇舊鑛山の開發史を取り上げ、近代に入り、交流を深めていく雲南と佛領インドシナとの關係の様態を検討してきた。⁽¹⁾

その過程で、滇越鐵路開通以降、内地地雲南が海域世界と緊密に結びつけられ、物資のみならず、さまざまな情報・人的交流の拡大がもたらされたこと、とりわけ鐵道關連勞働者として雲南に居住するヴェトナム人コミュニティが形成されていったことなどに關心を抱いてきた。

注目されるのは、こうした雲南のヴェトナム人コミュニティが、インドシナから亡命をよぎなくされたナシヨナリストたちを支える役割を果たした點である。ヴェトナムのナシヨナリズム運動については、これまで一九二〇年代から三〇年代のシャムや廣東におけるヴェトナム人ナシヨナリスト、とりわけホー・チ・ミンら共產主義者グループの活動に光があらわれ、多くの研究が蓄積されている。⁽²⁾しかし、三〇年代に限ってみても、潘佩珠や彊概らの流れを汲む初期民族運動や阮太學らのヴェトナム國民黨の運動など、共產黨以外にさまざまな立場にたつヴェトナム人ナシヨナリストの運動がヴェトナムに隣接する中國各地において展開していた。

ヴェトナム國民黨については、同黨の創立以來のメンバーであったホアン・ヴァン・ダオがサイゴン政權時代に、詳細な通史『ヴェトナム國民黨』を著している。ダオのこの著作は、中國におけるヴェトナム國民黨の活動にも多くの頁數を割いており、貴重な歴史の證言ともいえる。⁽³⁾しかしながら、關連史料による裏付けを缺いており、利用にあたっては注意を要する。近年、たとえば、多くの回想録を掘り起こして孫文主義受容の歴史を追ひ、國民黨を革命史のなかに位置づけようとしたグエン・ヴァン・カインの研究など、ヴェトナム國內においてもヴェトナム國民黨の歴史を再評價しようとする動きが現れている。⁽⁴⁾ただし、カインの研究においても、國民黨の國外における活動についてほとんど觸れられていない。

一九三〇年のヴェトナム・イエンバイにおける蜂起が鎮壓された後、ヴェトナム國民黨のメンバーの多くは、雲南に逃れ、そこを據點に獨立をめざすヴェトナム國民黨雲南第一支部を成立させた。一九四〇年、ホー・チ・ミンは雲南省の省都昆明に姿を現し、インドシナ共產黨を主體とした本格的な獨立運動を開始する。⁽⁵⁾こうした獨立運動につらなる一連の展開を理解するためにも、雲南第一支部をはじめとする三〇年代前半期雲南におけるヴェトナム人ナシヨナリズム運動の流

れをたどっておく必要があると考える。

雲南におけるヴェトナム人ナショナリストの活動に當初から着目していたのは、アルベール・サロー總督時代に整備されたインドシナ保衛局であった。最近、筆者はフランス國立文書館海外館 *Archives Nationales d'Outre-Mer* に所藏されている保衛局の作成したヴェトナム國民黨關係ファイル (GGL6544) を閲覧する機會に恵まれた。一九三〇年以降の同黨の活動狀況を詳細に報告・分析したこのファイルには、編纂資料からうかがえない主要活動家の供述調書も含まれている。本稿においては、このヴェトナム國民黨關係ファイルや他の同文書館資料を中心に紹介・分析し、一九三〇年代前半期の雲南におけるヴェトナム人のナショナリズム運動の展開を追うことで、佛領インドシナ連邦成立以降、とりわけ一九一〇年の滇越鐵路の開通以降に緊密化していった雲南・インドシナ關係の一端を明らかにしていきたいと思う。

一 雲南のヴェトナム人コミュニティ

雲南にヴェトナム人コミュニティが生まれる契機となつたのは滇越鐵路の開通であつた。⁽⁶⁾ 滇越鐵路は、ポール・ドゥメール總督時代に企畫され、一九一〇年に開通した。鐵道の開通によって、内陸部雲南への交通・移動は著しく容易となつた。一九〇八年、ミャンマー經由で干崖土司刀安仁の近代化事業を支援するため、雲南省干崖に渡つた實業家の大江卓は、歸國後に著した『雲南紀行』のなかで、次のように滇越鐵路建設の意義を論じている。

其地味豐饒、黎首蒸蒸、通商貿易の利も亦尠少ならず。而して廣東より西江の水路に據れば六十餘日を要し陸路も亦五十二日程なり。緬甸よりするも陸路二十八日を費さざれば此寶庫に入るを得ず。若し老街・雲南間に鐵道を敷設せば東京より省城に至る、僅かに數日にして足れり。是れ雲南に於ける通商競争上、遙に英國を凌駕するを得べく、且つ此鐵道は雲南省中、最も有望なる鑛區を横斷するの利あり。⁽⁷⁾

滇越鐵路は、五二日もの時間を要した從來の廣西ルートや陸路で二八日間を要したミャンマールートに比べ、雲南省の

省都昆明にヴェトナムからわずか数日でアクセスすることを可能にしたのである。じつさい、一九三〇年代、ヴェトナムの海防^(ハイクア)から昆明まで三日で到達することができた。⁽⁸⁾

滇越鐵路の建設にあたって、多くの中國人勞働力が投入されたことはよく知られている。しかし、標高差の激しい獨特の地形のため工事は困難を極め、かつ瘴癘(マラリア)の流行する風土への不適用に苦しみ、苛酷な勞働に堪えかねて犠牲となる者が數千人に及んだ。こうした中國人勞働者と並んで、多數のヴェトナム人勞働者が鐵道建設に参加していた。

一九〇三年以降、鐵道建設工事には六萬七〇〇名もの勞働力が投入されたが、そのうち一萬六三〇〇人がヴェトナム人であつたといふ。⁽⁹⁾

建設工事のみならず、開通後、護衛兵士や鐵道維持要員として雲南に居住するヴェトナム人も少なくなかつた。また後述するように、一九一四年、ハノイ襲撃事件を企畫したヴェトナム光復會の杜基光^{ド・キ・クワ}は、逮捕後、かつて箇舊錫鑛山で働いていたことを供述している。近代以降、世界的な錫需要にともない盛況を呈していた箇舊錫鑛山にも一定のヴェトナム人勞働力需要が存在したことを推測させる。また、一九二一年には、箇舊・蒙自の錫商人らを中心とする箇碧鐵路公司によって、滇越鐵路は箇舊にまで延長され、鐵道勞働者として居住するヴェトナム人の數をさらに増大させることになった。

インドシナ總督府保衛局の作成した地圖(圖一)に、後述するヴェトナム國民黨の活動據點の一つとして箇舊が加えられていることも同地におけるヴェトナム人の存在を示すものといえよう。箇舊におけるヴェトナム人は必ずしも杜基光のように鑛山勞働者に限られなかつた。箇舊では、一九一九年、コレラが流行し、七〇〇〇名を超える死者が出た際、ハノイ醫學院で學位を取得した中國人醫師を招聘し三〇〇名を收容可能な病院が建てられた。その際、醫療スタッフ・醫藥品・手術器具等はインドシナとフランス外務省によって供給されていた。⁽¹⁰⁾

滇越鐵路沿線には、箇舊以外にフランスの資本とスタッフによりいくつか病院が設置された。雲南府(現、昆明)には、一九一三年當時、フランス人の病院長とヴェトナム人醫師が駐在し、年間七六五七フランが投じられていた。ヴェトナム

に接近した蒙自にも九〇〇〇フランの経費で病院が維持されていた⁽¹¹⁾。後述するように、滇越鐵路の主要驛であった阿迷州にも病院が設けられ、そこには看護師としてヴェトナム人スタッフが配置されていた。鐵道及びその關連施設は雲南に將來された「近代」を象徴するものでもあったが、そこにはヴェトナム人の關與が少なからず認められるのである。

滇越鐵路の終點にあたる雲南省の省都雲南府には、一九二二年、昆明市政公所が設立され、本格的な都市行政が開始した。同公所の督辦となつたのは日本に留學し東京市等における都市行政を本格的に學んだ張維翰であつた。張維翰は廣州市政府の組織形態を取り入れつつ、人口十萬を擁する昆明に、上下水道・公園・商業區域等を設立するなど、さまざま近代的な都市機構を導入していった。⁽¹²⁾ そうした都市化事業にもヴェトナム人がかかわつていった。

一九二三年という、昆明市政公所が成立してまもない時期に滇越鐵路を利用し昆明を訪れた謝彬は、雲南の各種工業が多く「安南人」^{ヴェトナム}と廣東人の手によつて擔われていることに着目している。たとえば仕立業の場合、廣東人が三割に對し「安南人」が七割、家具業の場合は九割を占めていたし、水道會社が水道鐵管を敷設する場合、「安南人」労働者でなければ成功できなかった、と記している。⁽¹³⁾ 近代に入り成立した昆明等の都市社會に「インドシナ」から將來されたヴェトナム人の數が九八名から二七七六名に増加したとする駐雲南府フランス領事の報告はこうした雲南の近代化にともなうヴェトナム人の急増ぶりをよく示しているといえるだろう。⁽¹⁴⁾

ヴェトナム國民黨員として一九三〇年に雲南入りした黎・トウ・ソン^{黎・トウ・ソン}の回想によれば、以下に見られるように、雲南に居住するヴェトナム人の數は一萬人に達していたという。この數字には労働者とその家族が含まれていると見てよいであろう。

我々が雲南についた頃、越僑はほぼ一萬人以上存在し、主として「彼らは」フランス植民地當局の經營する滇越鐵路公司に屬する労働者であつた。……鐵道を守るために、フランスはフランス人の憲兵を率いてヴェトナム人の警察を組織し、昆明・開遠・蒙自・河口に駐屯させた。しかしこれらの地のヴェトナム人警察は、フランス領事の指揮下

に置かれ、領事はヴェトナム人を逮捕する権利を持ち、中國の國民黨政權の同意を必要としなかった。……鐵道沿線や驛にはまた、労働者が居住する多くの公共地域が存在した。河口・哈地・芷村・開遠・Ban Khe・宜良・昆明などの大きな驛には皆な車兩の修理工場が存在した。⁽¹⁵⁾……

黎松山によれば、當時、鐵道沿線の労働者の七〇パーセントはヴェトナム人で占められ、それ以外は廣東人であり、滇越鐵路公司に採用された雲南人は少數であった。黎松山は、また、沿線以外に、越僑が蒙自・鶏街・箇舊・建水・臨安・石屏などの地で、洋服屋・理髮店・大工・煉瓦職人・鑛山労働者・商業などの多くの職業に従事していたこと、多くのヴェトナム人商人が野菜・桃・梨・リンゴを仕入れハノイに運んで賣り、洋酒・タバコ・毛織物を持ち歸り、昆明で販賣するなどの商業活動に従事していたことなどを指摘している。⁽¹⁶⁾一九三〇年代、雲南には一つの越僑コミュニティが成立していたのである。黎松山は次のように述べている。

越僑社會についていえば、組織らしいものは、フランス領事が手先たちに設立させた「越南互助會」以外には存在しなかった。彼らは陳腐な祭禮や冠婚葬祭を奨励するだけだった。昆明や開遠には、義地(Hiệp địa)や土地廟(Công thổ miếu)が滇越鐵路公司によって設立されていた。鐵道沿線には多くの越僑が住んでいたが、いずれの地にもフランス植民地當局によって祠廟(Cần thờ)が建てられていた。祠廟には管理する老人や老女がおり、毎日線香をあげてはさかんに神懸かりをしていた。私が雲南にいた當時、一萬人を超える越僑がおり、昆明だけでも、「佛越小學」と呼ばれる小學校があり、數十人の兒童が學んでいた。越僑にとって學費を支拂うことは容易でなかった。⁽¹⁷⁾

鐵道建設は、以上のように、近代雲南に、祠廟(Cần thờ)などの宗教施設を伴った恒久的な「越僑」社會を成立せしめる契機ともなったのである。こうしたヴェトナム人コミュニティの成立は、同時に、反佛ナシヨナリズム運動の受け皿ともなり、多くの民族主義者を引きつける基盤でもあった。以下に雲南を目指したそうしたナシヨナリストたちの軌跡を跡づけてみたい。

二 ヲヱトナム國民黨雲南第一支部の成立

(一) ヲヱトナム光復會と雲南

滇越鐵路が開通もない時期から在雲南ヲトナム人コミュニティに着目し、抗佛運動を組織しようと試みたのは、潘佩珠らの組織したヲトナム光復會であつた。⁽¹⁸⁾

一九一四年一〇月、ハノイで爆彈を製造していた一團が逮捕された。同年十一月には、來るべき獨立國家の内容を示す證書が配布されるにいたつた。逮捕者の供述から、一連の事件が、光復會の指導者として雲南入りした杜基光が、滇越鐵路公司のヲトナム人スタッフとはかり、ヲトナム北部を麻痺させることをねらつた武裝蜂起を計畫していることが發覺した。⁽¹⁹⁾この武裝蜂起は事前にフランス植民地當局によつて察知され、杜基光以下五〇餘名が逮捕・處刑された。逮捕後、杜基光が行つた以下の供述が残されている。⁽²⁰⁾

一九一四年一〇月二四日午前九時、我々の前に治安警察署長クロード・エクソルティエは杜基光、すなわちド・ヤン・ティエツト、杜・眞・鐵、……三七歳、學生、……ハノイのアン・ハー社ティンハオ村生まれ、を召喚した。杜基光は次のように供述した。

私は三年ほどまえにハノイ兩替屋通り八八番地にある家を賣り拂い、中國の雲南に移住しました。私はしばらく舊の鑛山で工頭として働き、それから雲南府で行政法を教える法政學堂に入學することを許されました。私はこの學校に六ヶ月在學しました。それからホアン・グエン・ニンとともに潘佩珠を搜しに廣西の南寧に行きました。半年ほどホアン・グエン・ニンとともにそこに滞在した後、雲南に戻りました。

潘佩珠自身は、廣東の提督龍濟光によつて逮捕され、杜基光らの實行部隊と合流することはできなかった。在雲南府

ランス領事の報告等によれば、杜基光は滇越鐵路のフランス人エンジニアや、シュピーデルなど雲南府に支店を置くドイツ商社で通譯を務めていたヴェトナム人と接觸を持っていたという。⁽²¹⁾ 潘佩珠自身、後年、その回顧録『自判』のなかで、次のように杜基光の事蹟を回想している。

氏は雲南に向けて出發した際に、多くの光復會の文書を持參し、雲南に居住する我が越南の人びとを大いに立ち上げらせた。我が越僑のなかには、滇越鐵路の鐵道護衛兵士からボーイにいたるまで、蒙自一帯にそつてあわせて五〇名以上が光復會に加入した。まもなく歐州大戰が勃發すると、蒙自のドイツ領事の援助を得ることができ、運動はますます盛んになった。氏は鐵道護衛兵の紹介によりハノイに潛入し、ひそかに訓練隊長の某と交わり、互いに盟約を結んだ。⁽²²⁾

しかし、この運動に参加したグループの中には、^{レ・フー・ヒェツプ}黎夫俠のように、逮捕を免れ雲南の昆明に逃れ、唐繼堯政權に重用され、昆明の兵器廠の監督となる者も存在した。黎夫俠は、後述するように、日本に逃れた阮朝の王族彊樞の支持者としても知られ、一九二四年には「中越革命聯軍」を組織し越僑青年を吸収しようとつとめていた。その多くを昆明講武學堂に入學させ、訓練を施し、フランスと戦いうる軍人に養成しようとしたという。⁽²³⁾ 黎夫俠は、もと滇越鐵路の製圖技師であり、黎夫俠とともに「中越革命聯軍」に参加した^{ホ・グン・イ}黃文内は、雲南蒙自に生まれ、雲南府においてフランス・アジア石油會社の祕書をつとめていた。⁽²⁴⁾ 潘佩珠と彊樞らによつて設立された反佛武裝闘争組織は第一次大戰期の一連の武裝闘争路線が挫折した後も、形を變え、雲南の地に繼承されていたのである。

彊樞の影響を受けつつ、ヴェトナム人が多數居住する雲南に注目したもう一人のナシヨナリストとして^{レ・ホ・ン・シ}黎鴻山を擧げておきたい。黎鴻山は、これまで、ホー・チ・ミンが廣州で組織した青年革命同志會の有力メンバーであり、初期ヴェトナム共產主義運動の主要な指導者として常に言及される存在であつた。黎鴻山は、一九三二年に逮捕されるが、ヴェトナムに送還された後、植民地當局によつて詳細な供述調書が作成されている。この調書のなかで、黎鴻山はホー・チ・ミン

の共產主義運動に参加して以降も彊樞との間で親密な関係を維持し續けていたことを率直に語っている。⁽²⁵⁾

まず、この供述調書により、黎鴻山が雲南入りするまでの軌跡と雲南での活動を辿ってみたい。

黎鴻山は、本名を黎文藩^{レイ・ヴァン・ファン}といい、父安省ナムダン縣の出身であった。十八歳まで父親より漢文の手ほどきを受けるとともに村の學校で多少のフランス語を學んだ黎鴻山は反佛運動を展開していた黄花^{ホア・フア}探や潘佩珠の思想に惹かれ、一九二〇年春、まずシヤムに出國した後、海南島を経由し、廣東に入った。ドンズー運動が挫折して以後、潘佩珠らとともに杭州を據點に活動していた胡學^{ホ・ハク}覽らの援助を得て、杭州英文專門學校や廣東の嶺南大學で學んだ後、一九二一年二月、黎鴻山は日本亡命中の彊樞に接觸した。

黎鴻山は、彊樞の指示を受け、勤王運動の指導者潘廷^{ファン・ティン・ティン}逢を父に持ちながら、杭州ヴェトナム人コミュニティにおいてはフランスの協力者と目されていた潘伯^{ファン・バク・ボク}玉の暗殺を遂行したことで、彊樞の信頼を確たるものとした。彊樞は、ヴェトナム光復會による反佛武裝闘争がこれといった成果を生むことなく、しだいに佛越提攜論に傾きつつあった潘佩珠に強い危機意識を抱いていたと見られる。その後、黎鴻山は彊樞の要請を受け、インドシナに再び入國し、サイゴン・ハノイ各地で協力者の獲得と募金活動に奔走した。

祕密裏に行われたヴェトナム訪問をつうじ、彊樞と潘佩珠との間で不和が存在することにヴェトナムの人びとが少なからず不満を抱いていることを知った黎鴻山は、杭州に歸還した後彊樞に書簡を送りそうした聲を直接傳えた。これを受けて彊樞は杭州を訪れ、潘佩珠と直接面會し、行動の枠組みを廣げることで合意したという。

その後黎鴻山は彊樞とともに廣東に向かい、彊樞の命を受けコーチシナの彊樞支持者たちと連絡をとるべくサイゴンに密航した。一ヶ月ほどサイゴンに滞在し周邊の彊樞を支持する富農たちと接觸した後、廣東に戻っている。廣東では范鴻^{ファン・ホン}泰とともにメルラン總督暗殺未遂事件にかかり、その後、廖仲愷の紹介により黃埔軍官學校への入學を果たした。

胡松茂^{フ・トウ・マオ}らをつうじて廣東に現れた阮愛國^{グエン・アイ・クオック}（＝ホー・チ・ミン）を紹介され、阮愛國らの組織した心心社^{タム・タム・サ}に加わったのはこの黃埔軍官學校在學時代のことであった。同校を卒業すると同時に、黎鴻山は阮愛國が新たに組織した青年革命同志會の有力メンバーとなり、阮愛國の信任を得てヴェトナムの青年たちを廣東に呼び寄せ、黃埔軍官學校や阮愛國の創設した政治訓練學校に入學させる活動などに従事した。

蒋介石の反共クーデターにより國共合作が崩壊すると、一九二七年五月、阮愛國は廣州脱出をよぎなくされ、黎鴻山や胡松茂らも廣東で次々と逮捕・投獄された。一九二八年一月に釋放された後も胡松茂が再逮捕されるなど、廣東での活動が危険となったことから、黎鴻山らは香港のカオルンに青年革命同志會の本部を移した。

黎鴻山らは胡松茂の構想をもとに、ヴェトナム北部においては、インドシナ共產黨及びヴェトナム國民黨から、ヴェトナム中部においては、インドシナ共產黨と新越黨から、ヴェトナム南部においては、青年同志會^{グエン・フン・ミン}と阮安寧^{グエン・アイン・ニン}派らの黨派を糾合し香港において新たに「安南共產黨」を組織しようとした。しかし、ヴェトナム人ナショナリズム運動としての色彩の強い黎鴻山らのグループに對し、より階級闘争を強調するインドシナ共產黨系の支持者らが激しく對立したことはよく知られている。⁽²⁶⁾こうした對立は、シャムから歸還した阮愛國の主宰のもと、各派を「ヴェトナム共產黨」に統一することで一應の決着がはかれることになるが、黎鴻山のように、彊樞とのかかわりを保持しつつ、共產主義運動を展開するなど、すでに先學の指摘するとおり、青年同志會は必ずしも體系的なイデオロギーを據りどころとして結成された集團ではなかった。⁽²⁷⁾

注目されるのは、その後の黎鴻山の動向である。一九三〇年、阮愛國がシンガポールに出國した後、日本から彊樞の手紙を受領した黎鴻山は同封されていた百圓を資金として日本に渡航した。日本に入國した黎鴻山は、彊樞からパンフレットをヴェトナムに持ち込み宣傳するよう依頼された。そこには王制の原則を維持しながら、英國のように立憲君主制を採用することを認める、とする彊樞の新たな政治綱領が盛り込まれていた。

多くの危険をとまなうインドシナへの入境に代わって黎鴻山が選擇したのが雲南であった。黎鴻山は雲南行を望んだ理由を次のように語っている。

シヤムではヴェトナム人すべてが共產主義を身につけていた。雲南だけが残っていた。そこにはたくさんさんのヴェトナム同胞とかつての革命派が存在していた。彊樞に對し、自分は通常の證明書なしではシヤムに入るのは困難であり、言葉を知らない國で働くのは難しいと主張し、雲南に行くことを提案した。⁽²⁸⁾

一九三〇年九月、彊樞は黎鴻山の提案を受け入れ、上海行き汽船の切符と一五〇圓を黎鴻山に送り、雲南への渡航を支援した。翌年の一月、重慶を経由し陸路で雲南府に到着した黎鴻山は、黎拔群^{レイ・バツト・クワン}と名乗り、雲南在住のヴェトナム人ナシヨナリストとの接觸を開始した。

黎鴻山は中國國民黨雲南黨部の陳廷平・裴傳藩を介して雲南で活動していた阮世業^{グエン・テ・キエツ}らヴェトナム國民黨グループと接觸したと供述している。⁽²⁹⁾ 陳廷平らもまた黃埔軍官學校の卒業生であり、黎鴻山に協力的であった。しかし、阮世業らヴェトナム國民黨グループは黎鴻山を共產主義者ではないかと疑い、雲南の中國當局に訴え、逮捕されるにいたる。

雲南において、彊樞から派遣されたナシヨナリストとして自ら任じようとしたのであろう、中國國民黨雲南黨部の信任を得るために、黎鴻山は、廣東在住のヴェトナム國民黨指導者で、彊樞の支持者であった黃南雄^{ホアン・ナム・フン}に書簡を送り、自分がそのメンバーであることを昆明の中國國民黨に伝えるよう求め、じつさいに黃南雄からの返答を得た。⁽³⁰⁾

阮世業や武文^{ブー・ヴァン・サン}講ら雲南のヴェトナム國民黨グループの側でも、逮捕後、昆明の黎鴻山の住所に、日本に亡命中の彊樞からの書簡と「王」という文字を記した黄色の布地の旗が届けられていることを確認し、黎鴻山をヴェトナム・ナシヨナリズム運動の指導者であると認め、同書簡と旗とを雲南の國民黨支部に提供し龍雲政權に黎鴻山の釋放を求めるに至った。⁽³¹⁾ 黎鴻山の救出に動いたのは、しかし、在雲南ヴェトナム人ナシヨナリストだけではなかった。ドンズー運動以後、當時、南京に居住し多くのヴェトナム人グループを援助してきた胡學覽もまた、參謀長の朱培德に謁見し、直接龍雲に打電して

黎鴻山を釋放するよう働きかけていたとい⁽³²⁾う。

上記の一連の事例は、ホー・チ・ミンとの邂逅以降、急速に共産主義に接近していた黎鴻山にあっても、ヴェトナムの獨立を象徴するシンボルとして彊樞がなお無視できない存在であったことを示しているといえるだろう。龍雲政權よりミャンマーへの追放處分を受けた黎鴻山は、一九三三年末、シャムのチェンマイ經由で上海への歸還を果たしたものの、同年末には上海のフランス警察に逮捕されるに至るのである。⁽³³⁾

(二) 雲南におけるヴェトナム國民黨

黎鴻山が接觸を試みた雲南のヴェトナム國民黨支部とはいかに形成され、いかなる活動を雲南において展開していたのであろうか。雲南の越僑コミュニティの間で、ナショナリズム運動の組織化に本格的に取り組んだこのヴェトナム國民黨の來歴についてまず簡単に紹介しておくことにしたい。

杭州で亡命生活を送っていた潘佩珠は、メルラン總督爆殺未遂事件に刺激を受け、舊來のヴェトナム光復會を中國の國民黨にならって改組し、「越南國民黨」を設立することをめざし、「越南國民黨沙面事件彈安聲明書」や「越南國民黨規」などを執筆した。しかし、潘佩珠が新たに改組しようとした「越南國民黨」は、潘自身が一九二五年七月に上海のフランス當局に逮捕されたことによって、實質的な活動を展開することなく終わった。⁽³⁴⁾

孫文主義の流れを汲む政治理論の研究サークルからヴェトナム國民黨を形成していったのは、上述の潘佩珠ら在中國ヴェトナム人亡命者たちというよりは、ハノイを中心に展開した南同書社と呼ばれる學問・出版サークルであった。南同書社は、一九二五年、小學教師であった范俊才^{フアン・トゥアン・タイ}とその弟で職業出版人であった范桂林^{フアン・クエ・ラム}、ジャーナリストの黄范珍^{フアン・ファン・チン}らによって設立された。⁽³⁵⁾

南同書社は、『中國革命史』・『孫逸仙傳』・『世界の革命』・『三民主義』など中國の革命や孫文の傳記、革命史などを扱

つたパンフレットを編集した。この南同書社には、高等商業學校生であつた阮太學など、多くの青年知識人が集つた。彼らは、無料でクオック・グーの夜間教室を開催し、また、上海のフランス租界で逮捕されインドシナに送還・監禁されてゐた潘佩珠の恩赦を求めるデモを呼びかけるなどの活動を展開した。⁽³⁶⁾

こうした運動のなから、一九二七年末頃、ヴェトナム國民黨が設立された。⁽³⁷⁾ リーダーとなつた阮太學は、直接行動主義をとり、一九二九年、ヴェトナム南部やニューカレドニアのプランテーションにヴェトナム北部の農民を苦力として送り込んでいた労働者幹旋業者バザンを暗殺したことによつて、フランス植民地當局に注目されることになった。當時、ヴェトナム國民黨は、總部・圻部・省部・支部からなるヒエラルキー組織をつくりあげ、阮太學が主席として指導にあつた。總部には、執行委員會・立法委員會が置かれた。この執行委員會の主任となつたのが、阮世業であつた。⁽³⁸⁾

同じくバザン暗殺事件に連座し逮捕された阮世業は、一九〇六年、太平省延河縣植民地歩兵隊曹長の家に生まれ、初等高等教育課程終了後、一九二五年より二六年にかけて太平理事官府の祕書を務めていた。⁽³⁹⁾ フランス國立文書館海外館に残されている史料から、阮世業は一九二九年七月五日、十年間の禁固刑の判決を受けたものの、カオバンの刑務所に移管途中に脱走に成功し、一九三〇年初、雲南入りを果たしたことが判明する。⁽⁴⁰⁾

阮世業は、中國國民黨關係者や、雲南・インドシナ間のアヘン交易等に従事していたヴェトナム系商人を父に持ち、滇越鐵路の雲南への入り口にあたる河口で靴屋を営んでいた阮金吾^{グン・キン・グ}をつうじて、滇越鐵路に働く雲南のヴェトナムコミュニティやヴェトナム西北部に居住するタイ族の反佛勢力との接觸を深めていく。

以下に紹介するのは、一九三五年、上海のフランス領事館に投降した後、阮世業が行つた供述の一部である。

一九三〇年一月初め、阮金吾と私とは、河口の森林局で働く中國人の多くの若い官吏たちと知り合いになった。彼らは私たちが「安南人」^{ヴエトナム}革命家であることを知ると、雲南に越南國民黨支部を創設してはどうかと勧めてくれた。彼らは「中國國民黨」河口黨部のメンバーに我々のことを話してくれた。黨部の人たちは雲南に越南國民黨支部を創

設する場合には援助する旨、言明してくれた。……河口の黨部のメンバーに勇氣づけられ、阮金吾と私は越南國民黨雲南支部の創設に向けて、ただちに活動を開始した。私たちは、まず、滇越鐵路の労働者に對して宣傳を開始したが、河口にはあまり労働者が多くはなかったので、芷村に北上した。そこで、阮金吾は友人を見いだし、彼らの紹介で、雲南鐵道の車庫で働く多くの安南人労働者と關係を持つことができた。彼らを我々の側につけるのは容易だった。彼らの多くが自分たちの境遇に不満であり、奴隸として彼らを扱っていた滇越鐵路公司を強く非難していたからである。⁽⁴¹⁾

じつさい、阮世業は昆明驛で列車長として勤務していた陶周啓^{ダオ・エー・キ}をヴェトナム國民黨に入黨させ、陶周啓とともにヴェトナム國民黨雲南支部の結成に向けて、鐵道労働者の組織化を進めていった。數ヶ月の間に、雲南におけるメンバーの數は、約三〇〇名に達したという。陶周啓は後に、フランス當局に投降した後、以下のような供述を残している。⁽⁴³⁾

私は一九〇六年、河東省^{ハドシ}（トンキン）ホアンロン縣タイハ邑に生まれました。父はダオ・ヴァン・ブットといい、「小學校の」教師でした。……一九二六年九月、私は雲南府で電信實習生として滇越鐵路公司で働くようになりました。二ヶ月後、婆兮に送られ、翌年初には Phu Tho、それから Mu Thuy で助手として採用されました。助手としての採用では面白くなく、一九二七年頃、私は滇越鐵路の上司に轉換を頼みましたが、この請願は快く受け容れられ、雲南府における列車長に採用されました。この町に到着して數ヶ月後、雲南に「中越革命聯軍」と稱する安南人革命黨が存在するのを知りました。この組織は、黎夫俠という老人によって率いられていました。この黨はフランス人をインドシナから一掃し、日本に亡命している安南の王子彊^{キヤウ}を即位させることを目的としていました。私は當時、滇越鐵路のヨーロッパ人従業員らから侮辱を受けていらだっており、『社會契約論』などルソーの作品を呼んで夢中になっていたこともあり、何かしら革命的黨派に加わりたいと思っていました。

陶周啓の供述によれば、黎夫俠に接觸した頃、「中越革命聯軍」には定期的に會費を納入する會員が三〇名ほど存在したという。一九三〇年一月、阮太學^{イェン・バイ}が安沛^{イェン・バイ}で蜂起したのち、阮世業は、陶周啓をつうじて「中越革命聯軍」の存在を知

り、ヴェトナム國民黨との統合をはかった。一九三〇年初、黎夫俠が會議を召集し、各代表は皆な「中越革命聯軍」と「ヴェトナム國民黨」とを合併し、「ヴェトナム國民黨雲南第一支部 Van Nam Dê Nhat Dao Bo」(以下、第一支部と略稱)を組織することに同意した。阮世業を支部長、陶周啓を宣傳部長、黃文内を外務部長に選出した。⁽⁴⁴⁾

黨の規約はヴェトナム國內における國民黨の事例に着想をえながら阮世業によって起草された。たとえば、ヴェトナム國民黨雲南第一支部の任務として、規約のなかに次のように謳われていた。

(一) 國內においては、三民主義を廣め、すべての愛國者を侵略者・抑壓者との戦い、すなわち、大衆を黨の旗のもとに結集させ、フランス帝國主義との戦いを開始し、すべてのフランス人をヴェトナムの地から追放し、フランスと決定的に斷絶することを呼びかける。

(二) 國外においては、國外在住の同胞の間に世論の喚起を行い、行動を支持し、黨の經濟的科學的發展や抑壓された人民の解放に協力してくれる國々(革命と三民主義のゆりかごである中國、ヴェトナムの眞摯な友人であり支持者であるドイツ)との連合をめざす。⁽⁴⁵⁾

阮世業率いるヴェトナム國民黨雲南第一支部は、フランス勢力の一掃とインドシナ共和國の實現をめざし、黨員への軍事訓練をとまう行動プログラムを實踐した。黨員のなかには雲南講武學堂への入學を許され下士官となるもの、兵士となる者もいた。約五〇名が中國のさまざまな部隊に配屬されていたという。

ヴェトナム國民黨雲南第一支部の活動は、財政的には黨員の會費や支持者の寄付によって支えられた。これ以外に、とりわけ黨員の多い地域では商業的な事業を起こした。昆明の興仁街に設立した「農業工廠」(農機具修理工場)、宜良・芷村・臘哈地に開いた洋服店、猛喇^{ムオンラ}の東に確保した農業用地などがそれである。阮世業らはさらに加えて「地點」と呼ばれる據點作りを目指した。このほかにバモーへの進出が計畫された。一九三〇年九月、阮世業は昆明でテラーなどとして働いていた一五名のヴェトナム人を率い、ミャンマーのバモーに向かった。そこで、洋服店と食堂を開き、収益をヴェ

トナム國民黨に納入する計畫であつた。

阮世業がバモーに出發した後、新たにヴェトナム西北の「シブソンチャウタイ」と呼ばれるタイ族居住地域のリーダーであつた^{デオ・ディン・ルック}刁廷陸が、阮金吾をつうじてヴェトナム國民黨雲南第一支部に加わつた。刁廷陸は^{ライ・チャウ}萊州の有力首長であり、ヴェトナムの植民地化以降、對佛協力者となり、クワンタオ（管道）として強大な統治權限を付與された^{デオ・ウエン・チ}刁文持の息子であつた。⁽⁴⁶⁾刁廷陸自身は「ハノイで育てられたため、タイ語で表現することはできなかったが、^{ウエン・ナム}安南人を愛し彼らの言葉をしばしば話した」という。⁽⁴⁷⁾ハイフォンの職業學校で教育を受けたこともある。

フランス植民地當局は、刁文持の死後、^{デオ}ライ・チャウの刁氏一族に對し、徐々にその權限を削減する方針をとつたが、刁氏一族のなかには刁廷陸のように、反佛指向を鮮明にする人物が出現してゐたのである。刁廷陸は、一九二七年一月、ライチャウで起きた監獄の暴動事件に加わり、雲南側のタイ族居住地である猛喇周邊に亡命した。一九二六年當時、ライチャウ監獄には四二六名の囚人が投獄されていたが、その大部分は紅河デルタのヴェトナム人であつた。フランス植民地當局は、一九二〇年代以降、デルタ地帯から「危險人物」を切り離すために内陸の高地に強制移住させる政策を採用した。ライチャウ監獄はいわば政治犯を收容する流刑地にほかならなかつた。⁽⁴⁸⁾

刁廷陸はこの叛亂グループの指導者に選出されたという。對佛協調路線をとる刁氏一族への不満もさることながら、ハノイで學びヴェトナムの置かれた現實に接したことが監獄襲撃事件に同調していった要因であろう。刁廷陸は、ライチャウを管轄する第四軍區の司令官とヨーロッパ人を殺害して金銭・武器・彈藥を奪い、現地人兵とともに中國に入り、匪賊集團を組織しヴェトナム北部を攻撃することを目指したという。ヴェトナム西北の白タイ地域において、フランス植民地當局との間で武力衝突に發展したのはこのライチャウ監獄襲撃事件が最初であつた。

雲南入りした刁廷陸は、匪賊の討伐に協力したことから、蒙自の有力軍人より猛喇に土地の提供を受けることに成功し、猛喇にヴェトナム人を集め武装據點を作る構想を立てた。水田耕作に従事するいっぽう、武力闘争に備えて手榴彈の製造

などを行う計画であった。猛喇は、瘴癘すなわちマラリアが猖獗していたことから、阿迷州病院の薬剤師を務めていたヴェトナム看護師が種々の薬品を提供し、その活動を支えた。猛喇での據點形成は、一九三一年一月、刁廷陸が匪賊との戦いで戦死したことにより挫折するが、在雲南ヴェトナム國民黨のなかにタイ族の反佛勢力と連携しつつ軍事活動據點を形成していこうとする指向が生まれていたことは注目される。

阮世業らが滇越鐵路の労働者に多くのヴェトナム國民黨支持者を廣げていったことは前述した通りであるが、同黨が雲南在住ヴェトナム人コミュニティにクオック・グーの普及活動を行っていたことも見逃せない。阮世業は、一九三一年二月、成人向けの夜學を開設した。教師を務めたのは、インドシナにおいて小學校教員の資格を持つヴェトナム國民黨員たちであった。教科書とノートは黨が用意したが、最初から滇越鐵路の従業員の子弟からなる二〇数名の生徒が参加していたという。この夜學の成功に勇氣づけられ、越僑のために潘佩珠を記念した「巢南學校」を開設する豫定であったと阮世業は供述している。⁽⁴⁹⁾

しかし、一連のナシヨナリストたちの「地點」構想は、いくつかの小規模な藥局や洋服店を除いて、必ずしも實を結ぶことなく終わった。原因の一つは、ヴェトナム國民黨雲南グループ内部に激しい内部對立が生まれたことにある。當初、協力的であった阮世業と阮金吾とはしだいに對立を深め、ついには、一九三一年五月、阮金吾は反對派に暗殺されるにいたるのである。

阮金吾派の指導者であったグエン・ディン・ダーは、雲南當局に阮金吾暗殺に加擔した阮世業・陶周啓・武文講らを告發した。⁽⁵⁰⁾これを受けて雲南省長の龍雲は、直接殺害に關與した楊自成^{ズオン・トゥ・タイン}を逮捕・處刑するとともに、阮世業らを三年餘に及ぶ禁固處分とした。この事件以後、もと「中越革命聯軍」の設立者黎夫俠らもヴェトナム國民黨雲南第一支部から離脱することになった。

三 在中國「ヴェトナム國民黨」諸黨派と雲南第一支部

(一) 在中國「ヴェトナム國民黨」諸派

これまで、南同書社の流れを汲むヴェトナム國民黨の雲南への傳播、その活動を追ってきた。しかし、ヴェトナム國民黨の浸透は、雲南に限られず、廣東をはじめ、中國の他地域においても見られた。雲南におけるヴェトナム國民黨の活動はそうした他地域の在中國ヴェトナム人ナショナリズムの運動とどのような關係を持ったのであろうか。

雲南を目指した黎鴻山の事例ですでに觸れたように、廣東においては、ホー・チ・ミンらの指導した青年革命同志會及びインドシナ共產黨に吸収されることのなかったナショナリストの運動がなお存在していた。潘佩珠の改組の試みが挫折して以降も、廣東において「越南國民黨」を自稱した集團はその一つである。

一九二九年頃、ヴェトナムのハザンからトー人（現、タイ）出身の令澤民^{レン・チヤク・ザン}が廣東に現れた。令澤民は、中國國民黨廣東省黨部委員の陳銘樞・黃季陸に「東方被壓迫弱小民族聯合會」の設立を求め、廣東省黨部の承認を得た。黃埔軍官學校を卒業したばかりのヴェトナム人韋登祥^{ヴィ・タン・トイ}（別名韋正南）がこれに協力したが、同「聯合會」自體はヴェトナム人以外の参加者を得るには至らず、實現できなかった。そこで、令澤民・韋登祥の二人は、中國在住のヴェトナム人百餘名を募り、中國國民黨廣東省黨部において、「ヴェトナム國民黨總黨部」を成立させた。中國國民黨は令澤民側に毎月四〇〇メキシコドルの支援を與えていたといふ。⁽⁵¹⁾

しかしヴェトナムからの新來の亡命者にすぎない令澤民は武海^{ヴィ・ハイ・トウ}秋や日本に在住する彊樞を支持する黃南雄ら廣東生活の長いナショナリストたちから激しい抵抗を受け、必ずしも安定した黨派を廣東において維持することはできなかった。黃南雄は、中國國民黨内で影響力のあった謝英伯に働きかけ令澤民に對する批判を展開させた。⁽⁵²⁾その結果、廣東省政府は

令澤民の黨の解散を命じ、令澤民は香港への逃亡を餘儀なくされた。令澤民が新たに協力を求めたのは南京國民政府であった。

令澤民は南京政府軍事委員會主席盧漢の仲介によつて國民黨執行委員會と接觸し、南京にヴェトナム國民黨本部を設置すること、月額二〇〇ドルを受領することを認めさせるのに成功した。⁽⁵³⁾ 令澤民自身は、一九三三年に南京に客死するが、その後も韋登祥らは引き続き國民政府の支持を獲得していた。たとえば、一九三三年一月には「弱小民族」會議が亞洲文化協會の主催で開催された。この會議には、ビルマ・フィリピン・インド・朝鮮などの代表も参加し、ヴェトナムからは韋登祥が参加したといふ。⁽⁵⁴⁾

中國國民黨のこうしたヴェトナム國民黨への支援は、一九二六年六月に廣州で開催された國民黨二全大會海外黨務決議案として採擇された「弱小民族連帶方案」の方針を繼承したものと見えよう。そこでは「今後、各地の黨部は弱小民族連帶委員會を組織し、當地原住民のうち革命思想をもつものと連帶する」ことが謳われていた。⁽⁵⁵⁾ 一九三三年七月には、南京に「ヴェトナム國民黨中央幹部委員會海外辦事處」（以下、「海外辦事處」と略稱）が創設され、主席には前年死去した令澤民に代わつて韋登祥が就任した。

この「海外辦事處」に雲南のヴェトナム國民黨指導者阮世業らが加わることになった。フランス植民地當局側の資料によれば、投獄中の阮世業らがフランス當局に引き渡されるのを恐れた武進^{グー・ティエン・ル}侶らは、南京に向かう中國國民黨雲南省支部責任者であつた裴傳藩に同行するとともに、南京政府に阮世業らの釋放を求めたのだとしている。⁽⁵⁶⁾

その結果、阮世業・武文講らは雲南を刑期途中で追放され、活動の據點を國民政府の首都南京に移すこととなった。南京入りした阮世業は、在雲南ヴェトナム人活動家の主張を南京の「海外辦事處」に反映させようとした。一九三四年一月には、四〇頁からなるクオック・グーによるパンフレット『前進』を發行した。『前進』のなかでは、「安南を獨立に導く唯一の手段として、暴力的手段の採用」が宣傳された。これらの主張は、武文講・陶周啓ら雲南第一支部の設立に関わつ

た初期雲南活動家の主張と共通している。

阮世業の組織活動はしかし、順調には進まなかった。とりわけ、潘佩珠の組織したヴェトナム光復會以來廣東を據點としていた鄧師墨^{ダン・ス・マツク}や武海秋らのヴェトナム人ナショナリストたちは、新世代に屬する阮世業が自分たちを差し置いて黨の最高機關を設立しようとすることを許すことができなかったのである。

阮世業はしだいに在中國ヴェトナム人コミュニティにおいて孤立を深め、一九三五年七月、ついには上海のフランス總領事館に投降するまでに追い込まれていく。しかし投降にあたっては、組織上の孤立以外に、世界情勢に對する認識の變化も少なからず影響していた。阮世業は、雲南で活動していた一九三一年春頃、昆明駐在日本領事と接觸を試みたことがある。ヴェトナム人革命家を日本の軍事學校で學ばせようとしたのであったが、阮金吾殺害事件で逮捕・投獄されたことで、その後、在昆明日本領事館との關係は斷たれた。⁽⁵⁷⁾ 阮世業は南京で中國語や英語の新聞を讀む中で、しだいに臺頭する日本の脅威を認識し始めていた。阮世業はこう供述している。

日本が中國で犯している野蠻な行爲に關する記事が私の興味を惹いた。そして少しずつ日本がアジア諸國において敵對者であると思うようになった。日本の野望や征服の欲望は、安南人がフランスをインドシナから驅逐したとしても安南人がつづいて日本に抵抗することになることを恐れた。日本のインドシナに對するねらいは明確であったからである。ヴェトナム人にとって、それはこれまで経験したことのない戦いであり、準備もまったくなされていなかったものであるし、中國からの支援もあてにできない。熟考したすえに、私は「ヴェトナム」は單獨では、日本の野蠻さから守ることはできず、そのためにはフランスの保護を受けた方がよいと結論した。⁽⁵⁸⁾

アジアへの侵略の度を高めつつ、いずれは日本の矛先がヴェトナムに向けられるであろうことを考慮し、フランスとの協力を指向するという、かつては潘佩珠も一時傾いた、新たな佛越提携論であるといえるだろう。

當時、南京には、韋登祥率いるヴェトナム國民黨以外に胡學覽ら古參の獨立運動家や黄文歡^{ホア・ヴァン・ホア}のような共產黨系の

ヴェトナム人ナショナリストたちが居住していた。こうした人びとのなから、各地の在中國ヴェトナム人獨立運動家を糾合し統一組織を作ろうとする動きが現れたが、その一つが「ヴェトナム獨立同盟會」の結成であった。ホアン・ヴァン・ダオによれば、胡學覽・武海秋は雲南からやってきた武文講と會いすべての革命勢力を結集するよう提案し、一九三四年八月には代表者會議が開催され「ヴェトナム獨立同盟會」が發足した。主席には「海外辯事處」主席の韋登祥が就任した。⁽⁵⁹⁾ 黃文歡は、一九三六年初、胡學覽・阮海臣・黃文歡らは中國國民黨宣傳部長陳立夫の代理と面會し正規の認可を得るのに成功したと回想録に記しているが、「海外辯事處」主任の韋登祥が同盟會主任の地位につくなど、ヴェトナム國民黨が深く關與していたことにはほとんど觸れていない。⁽⁶⁰⁾

しかし、上述のように雲南派と廣東派の對立を抱えたヴェトナム國民黨は十分に把握できていたわけではなかった。くわえて一九三五年五月には、「海外辯事處」の活動に對する中國國民黨からの資金援助も打ち切れ、阮世業とともに雲南から南京に移った武文講らも「海外辯事處」から離脱するなど、次々と支持者を失うなか、韋登祥は彊樞に手紙を書き、ヴェトナム國民黨への協力を求めた。これに對し、彊樞はドンズー運動以來の親密な協力者であった武海秋（阮海臣）を南京に派遣し、韋登祥と交渉に當たせたとした。⁽⁶¹⁾ したがって阮海臣が中國國民黨宣傳部において胡學覽とともにヴェトナム獨立同盟會の承認を求める場に同席するにあたっては彊樞の意向が強く働いていたと見られる。

抗日戰爭期、ホー・チ・ミンは、中國國民黨の公認を得たヴェトナム獨立同盟會という枠組みを有効に用い雲南・廣西の國境地帯において獨立運動を積極的に展開していくことになるが、彊樞の側でも、一九三六年一月に、「ヴェトナム獨立運動同盟會 Việt-Nam Độc-Lập Văn-Động Đồng-Minh Hội」の名義でフランス政府に公開書簡を送り、フィリピンの例にならない、一〇年ないし二年後の獨立を求めるなど、この組織の繼承者としての姿勢をアピールした。しかしその後日中戦争が勃發するに及んで、彊樞は同盟會路線を放棄し、日本との連携に基づく獨立を掲げた新組織「復國同盟會」の樹立に向かわざるをえなかった。⁽⁶²⁾

(二) 在雲南ヴェトナム國民黨グループの再編

龍雲政權による阮金吾殺害事件を契機とした阮世業・陶周啓・武文講ら雲南第一支部の設立に貢献した活動家の逮捕・雲南追放處分によって、雲南におけるヴェトナム國民黨の活動は停滯した。とりわけ、南京から祕かに雲南に歸還した陶周啓らによるヴェトナム北部・雲南國境地帯への武力攻撃といった短絡的な直接行動主義は、雲南在住ヴェトナム人の離反を招き、一九三四～三五年頃は、黨費の納入を拒否する者が續出した。

しかし、その後、武文講が一九三五年九月に祕かに昆明に歸還し、活動を再開した⁽⁶³⁾。この時期、ヴェトナム國民黨雲南總支部の活動で注目されるのはプロバガンダ戦略の重視である。この時期、ヴェトナム國民黨によってクオック・グーによる雑誌『鐵血』が発行されている。⁽⁶⁴⁾『鐵血』は、一九三六年一月一日より三月一六日までのあいだに、合計一一號刊行され、とりわけ二月一〇日には、一九三〇年のイエンバイ蜂起のヒロイズムを稱え、中國の支援のもとにフランスからの解放を獲得すべきことを呼びかけた。『鐵血』のモデルとなったのは、南京「海外辯事處」時代に刊行された『前進』であったという。しかし、反佛闘争を呼びかける内容はフランス領事の抗議を招き、雲南當局は『鐵血』の發刊停止とその配布者の省外退去を命じた。

こうしたプロバガンダ活動と並んで注目されるのは、滇越鐵路で働く未組織のヴェトナム人労働者に對する宣傳・勸誘活動であった。中心となったのは陳玉俊^{チヤン・ゴク・トゥン}であった。陳玉俊（一九〇七年、海陽^{ハイヤウ}省カムザン縣生まれ）もまた、もと小學教師であった。一九三二年八月、ヴェトナムから雲南・昆明に亡命したが、翌年には南京入りしている。⁽⁶⁵⁾南京砲兵學校においても在籍を認められたが、一九三五年十二月、廣西を經由し再び昆明に歸還した。

陳玉俊は雲南において、『勞工親愛會』や『越南駐滇同鄉會』などの在雲南ヴェトナム人の相互扶助をめざした組織を設立した。前者からは『大衆週報』と名づけた機關誌を一九三六年四月から十二月までのあいだに一七部ほど發行し、イ

インドシナの現状を告發する文章を多く載せた。また、「少年育才會」として、雲南在住の六歳から一八歳までのヴェトナム人を組織し、日曜にサッカー大會を開催するなどのスポーツ・文化活動を展開した。⁽⁶⁶⁾ 陳玉俊は、南京滞在當時、胡學覽らのサークルに加わり、黃文歡らヴェトナム共產黨系のグループと接觸を深めていた。⁽⁶⁷⁾ 一九三六年八月には、サイゴンで刊行されていた「*La Tribune*」を中心に、フランスでの人民戦線内閣の成立を受け、種々の民衆の要求を受け入れる「インドシナ大會」を支持する廣汎な運動が展開されたが、陳玉俊はこれにこたえ、「雲南における安南人の人民戦線」と題するパンフレットを作成し、雲南においても在雲南ヴェトナム人勢力の人民戦線を組織しようとしたのである。⁽⁶⁸⁾ こうした陳玉俊らのグループのなかから、日中戦争開始以降、「越南民衆響應中國抗日會」が組織され、後のヴェトミンへと繼承されていくことになるのである。⁽⁶⁹⁾

おわりに

雲南に展開したヴェトナム國民黨は、雲南に成立したヴェトナム人コミュニティを支持基盤としていた點で、他地域の在中國ヴェトナム人ナショナリストの運動とは異なる特徴を持っていた。フランス治安機關が把握していただけでも、在雲南ヴェトナム人人口約四五〇〇名、成年男子一〇〇〇名のうち、その半分が滇越鐵路の労働者であった。彼らは中國文化に必ずしも埋没したわけではなく、獨自の言語や信仰を保持することができた。

フランス植民地當局は、廣東に住む革命派のなかで最も影響力があつたのは潘佩珠・潘周楨^{フアン・チュ・チン}の世代に屬する移住者たちであつたが、その大部分が中國社會に同化していったことを指摘している。彼らは豊かな商人ないしは有力大學の庇護を受け、中國社會での生活にのみ關心を持ち、故國で實現した「進歩」をほとんど知ることにはなかつた、としている。⁽⁷⁰⁾ ヴェトナム國民黨内における廣東・雲南兩派の對立を、こうした世代間の意識の違いに起因するととらえることも可能であろう。

一九三〇年代前半、阮世業以降の雲南ヴェトナム國民黨の指導者であった武文講や陳玉俊がいずれも元小學教師 *instituteur* であつたように、雲南を目指したヴェトナム國民黨の活動家のなかに、多くの小學教師が含まれていたことは示唆的である。三〇年代に入ると、いわゆるトンキン（ヴェトナム北部）地區においては、小學教師の数は二〇二一名に達していた。⁽⁷²⁾ クオック・グーとフランス語教育を行う佛越學校 *l'école franco-indigène* による教育がしだいに定着しつつあつたのであり、ヴェトナム人教師はそれを支える存在となつていた。こうした「佛越學校」から、とくに二〇年代後半以降、ヴェトナム人ナショナリストが輩出してくることになる。

たとえば、一九二八年、南定の高等小學校 *l'école primaire supérieur* においては、モンテスキュー『法の精神』の授業のなかで、『安南人』が自治を擔うだけの徳を缺いていると公言してはばからなかつたフランス人教師を生徒らが告發する事件が起つた。これを受けて學區長や理事長官府が調査に乗り出し、その結果、南定高等小學校第四學年の三〇名のうち二八名が退校、指導者六名が公的職務への就勢不能が宣告されるといふ厳しい處分が下された。⁽⁷³⁾ 就勢不能宣告を受けた指導者のなかには、一九三二年九月に雲南入りし、阮世業の投獄中、ヴェトナム國民黨雲南第一支部を指導した武進侶も含まれていた。武進侶は、タイピン省タイニンに、阮朝時代の教育監督であつた訓導 *Huân Đạo* の息子として生まれた。佛越學校でヨーロッパ式教育を受ける道を選びはしたが、そのフランス優越主義に立つ授業に反發を覺え、ナシヨナリズム運動に飛び込んでいった一人であつた。

ヴェトナム國民黨は、以上のように高等商業學校・高等工藝學校などの高等教育機關の在學生や小學教師らによつて擔われたが、確かに三民主義を掲げているにせよ、基本的にクオック・グーにより自己の精神形成を果たした世代に屬していたということができよう。阮世業も在昆明日本領事と接觸する際に、漢文による筆談が不可能であり、フランス語を用いざるをえなかつた。この點、一八歳まで父親から嚴格な漢文教育を受け漢文による供述書（二部）を作成しえた黎鴻山の場合とも異なっている。

滇越鐵路の開通以來ヴェトナム人コミュニティを取り込んだ雲南はこうした新世代ヴェトナム人ナショナリストの「出洋」先であり、その重要な受け皿となったのである。こうしたヴェトナム人コミュニティに支えられつつ、本國において壊滅的な打撃を受けながらもヴェトナム國民黨は維持され、日中戦争期のインドシナにおける政治情勢の變化に刺激され、一九四〇年代に入って再び黨勢を擴大していく。その中には、陳玉俊や黎松山らのようなホー・チ・ミン率いるヴェトミンへの参加者も生まれていた。⁽⁷⁴⁾これら雲南・廣西邊疆地域で活性化した四〇年代の在國ヴェトナム人によるナシヨナリズム運動については稿を改めて検討していくことにしたい。

〔凡例〕

以下の略稱を用いる。

ANOM: Archives Nationales d'Outre-Mer

ADN: Archives Diplomatiques de Nantes

註

- (1) 「デオヴァンチとその周邊——シブソンチャウタイ・タイ族領主層と清佛戦争」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態——中國周緣地域の歴史と現在』風響社、二〇〇三年、
- 「近代雲南錫業の展開とインドシナ」『東洋文化研究』五號、二〇〇三年、一―三三三頁。
- (2) 近年の動向として、ヴェトナム語文獻やフランス・ロシア各地の文書館資料を駆使した以下の研究が注目される。
- 古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命の中的エスニシティ』大月書店、一九九一年、白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』嚴南堂書店、一九九三年、
- Duker, William J., *Ho Chi Minh*, New York, Hyperion, 2000. Quinn-Judge, Sophie, *Ho Chi Minh: The Missing Years 1919-1941*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 2002. Tran, My-Van, *A Vietnamese Royal Exile in Japan: Prince Cuong De, 1882-1951*, London & New York, Curzon Press, 2004. 栗原浩英『フー・ン・タルン・システムとインドシナ共産黨』東京大學出版會、二〇〇五年。
- (3) Hoàng Văn Đào, *Việt Nam Quốc Dân Đảng: Lịch Sử Đầu Tranh Cận Đại 1927-1954*, Saigon, 1970. (ホアン・ヴァン・ダオ『ヴェトナム國民黨——近代闘争史一九二七―九五四』)。本書は「近年」フィン・クエにより英譯が刊行された(Hoàng Văn Đào, translated by Huynh Khue, *Việt Nam Quốc Dân Đảng: A Contemporary History of a National*

- Struggle 1927-1954*, Rosedog Books, Pittsburgh, Pennsylvania, 2007)。
- (4) Nguyễn Văn Khánh, *Việt Nam Quốc Dân Đảng: Trong Lịch Sử Cách Mạng Việt Nam*, Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, Hà Nội, 2005 (クエン・ヴァン・カイン『ベトナム國民黨：ヴェトナム革命の歴史のなかで』)。
- (5) ホー・チ・ミンは、昆明の金碧路七七號にあるヴェトナム人宋明芳の家に滞在したが、この人物もまた、三〇年以上にわたって洋服屋を営み、ヴェトナム人の革命運動を支える存在であった。黄錚『胡志明與中國』解放军出版社、一九八七年、六二頁、を参照。
- (6) 演越鐵路に對しては、これまで、主としてフランス側の敷設構想及び建設過程に關心が向けられ、研究が進められてきた。代表的なものに、Lee, Robert, *France and the Exploitation of China 1885-1901: A Study in Economic Imperialism*, Hong Kong & New York, Oxford University Press, 1989 がある。
- (7) 大江卓『雲南紀行』（稿本、現、國會圖書館憲政資料室「大江卓文書」一七八號）。大江卓と雲南とのかかわりについては、拙稿「清末雲南タイ系土司の近代化ヴィジョン——刀安仁とその周邊」塚田誠之編『民族表象のポリテクス——中國南部における人類學・歷史學的研究』風響社、二〇〇八年を参照。
- (8) 山縣初男『新支那案内記』萬里閣、東京、一九三九年、三六二頁。
- (9) Compagnie française des chemins de fer de l'Indochine & du Yunnan et Société de construction de chemins de fer Indo-chinois, *Le chemin de fer du Yunnan*, Paris, 1910, p.142.
- (10) A. Guérin, Monsieur le Chargé d'affaires de France en Chine Pékin, Yunnanlou, le 24 janvier 1921. Annexe. Au pays de l'étranger. Rapport sur la région de Kokiu. Notes recueillies par le docteur Jarland, carton 207, 63/3. Mines d'étain de Kokiou, Pékin, ADN.
- (11) Note pour M. le Gouverneur Général de l'Indochine, Hanoi, le 26 Novembre 1913, ANOM, PA, 9PA4/5.
- (12) 張維翰「回憶錄——陳馴流萍九五年」『張維翰先生文集（上冊）』中國國民黨中央委員會黨史委員會、臺北、一九八六年、一〇九—一一七頁。
- (13) 謝彬『雲南遊記』中華書局、一九三四年、九五頁、「雲南各項工業、多操安南人及廣東人之手。縫紉業、粵人佔十之三、安南人佔十之七、家具業、粵人佔十之一、安南人居十之九。對此兩項日用工業、本省人皆絕無僅有。甚至自來水公司安設水道鐵管、非用安南工人、不能成功」。
- (14) Morlat, Patrice, *Indochine années vingt: le balon de la France sur le pacific (1918-1928)*, Les Indes Savantes, Paris, 2001, p.490.
- (15) Lê Tung Sơn, *Nhật Ký Mãi Chàng Đường: Hồi Ký Cách Mạng* (レー・トゥン・ソン『わが人生のあの時代の日記——革命の回憶』) Nhà Xuất Bản Văn Học, Hà Nội,

- 1978, tr. 14-15.
- (16) Lê Tùng Sơn, *sđđ*, tr. 16. さらに觸れた謝彬は、滇越鐵路の驛にはどこでも「安南人」が居住し、さらに、同時期フランス植民地官僚の課す重税に耐え切れず、雲南を「樂土」と見なして多くのヴェトナム人が雲南へ入境しているとの沿線地域の状況を傳えている。雲南への移住が重税回避の手段としても構想されていたことを示すものであろう。(謝彬前掲書、六一頁、「一九二三年十月十二日、阿迷州付近」沿途車站、皆有安南人居住、聞近年入境更多、蓋不堪法吏之橫征暴斂、而以雲南爲樂土者也。……)。
- (17) Lê Tùng Sơn, *sđđ*, tr. 16.
- (18) 潘佩珠の設立したヴェトナム光復會については、白石昌也前掲書、第二章「東遊運動以降のファン・ボーイ・チャウ」を参照。
- (19) Coulet, Georges, *Les sociétés secrètes en terre d'Annam*, Saigon, 1926, pp.18-19.
- (20) Jugement des révolutionnaires par les Conseils de Guerre au Tonkin. Interrogatoire. ANOM, FM/INDO/NF, dossier 192, Complots (1914-1915).
- (21) Le Délégué p.i. du Ministère des Affaires Étrangères au Yunnan à M. le Gouverneur Général de l'Indochine Hanoi, Yunnanfou, le 2 Octobre 1914, Marty, Note pour Monsieur le Procureur General, chef du service judiciaire en Indochine à Hanoi, Hanoi, le 24 Octobre 1914, ANOM, GGI/65528.
- (22) 潘佩珠『自判』(内海三八郎著、千島英一・櫻井良樹編『ヴェトナム獨立運動家 潘佩珠傳——日本・中國を駆け抜けた革命家の生涯』芙蓉書房、一九九九年、所收)、二九九頁。
- (23) Hoàng Văn Đảo, *sđđ*, tr. 184-185.
- (24) Déclarations de Nguyen The Nghiep, Index, p.18, ANOM, GGI/65444.
- (25) Interrogatoire de LE VAN PHAN dit HONG SON fait à la Sûreté Générale Indochinoises le 24 Octobre 1932 et les jours suivants, ANOM, SPCE/367.
- (26) 古田元夫『ボー・チ・ミン——民族解放とドイモイ』岩波書店、一九九六年、七四―八四頁、同前掲『ベトナム人共產主義者の民族政策史』、第一部 國際主義の時代(一九一五―一九三九)、第二章を参照。
- (27) 栗原浩英前掲書、六三頁。
- (28) Interrogatoire de LE VAN PHAN dit HONG SON, *op. cit.*, pp.25-26.
- (29) 陳定萍は中國國民黨雲南省黨部宣傳部長、裴傳藩は組織部部长であつたこと(Note de la direction de la Sûreté Générale Indochinoise au sujet du mouvement nationaliste annamite à l'extérieur, ANOM, GGI/65444)。裴傳藩は裴存藩を指すと見られる。裴存藩は雲南恩安の人、黄埔陸軍軍官學校第三期の卒業であり、一九二九年より、雲南省黨務指導委員會委員兼書記長の地位にあった(徐友春編『民國人物大辭典』(增訂版) 河北人民出版社、二〇

〇七年、二三〇八頁。

- (30) 中國共產黨と「安南共產黨」との連絡役として上海で活動していたレー・クアン・タットは、逮捕後、黎鴻山について以下のように供述している。「中國に滞在した頃、黎鴻山はまだ共產主義の思想を身につけていなかった。彼は安南人の革命運動の代表者として潘佩珠と彊樞しか知らなかった。彼はこの二人に全幅の信頼を寄せていた。彊樞の求めに應じて、ファン・バー・ゴックを躊躇なしに殺害した。この行動によって彊樞の信頼を獲得し、それ以来、彼に對して敬意をも含んだ同情の念を示し、彼が共產黨員ではないかと疑われた場合でも彼を自分のもとに戻そうとした。この目的から、彼に對して自分の感情を示し援助を與えた。とりわけ黎鴻山が雲南で捕まった際には、援助を與え、釋放を獲得しようとした」(Déclaration de Le Quang Dat, ANOM, SPCE/367.)。
- (31) Déclarations de Nguyen The Nghiep, ANOM, GGI/65444.
- (32) 黃文歡『滄海一粟——黃文歡革命回憶錄』解放軍出版社、一九八七年、八三頁。
- (33) チャン・ミー・ヴァンは、黎鴻山が雲南追放後一九二八年にシヤムに入つたところから誤りである。Trần Mỹ-Van, *op. cit.*, p.118.
- (34) 白石前掲書、六六二—六六三頁。
- (35) 南同書社にひくは、Direction des Affaires Politiques et de la Sûreté Générale, *Contribution à l'histoire des mouvements politiques de l'Indochine française. Gouvernement Général de l'Indochine. Documents vol.N° II. Le "Viet-Nam Quoc-Dan Dang" ou "Parti National Annamite" au Tonkin (1927-1932)*, 1933, par le Directeur p.i. des Affaires politiques, et de la Sûreté Générale, L. Marty を參照。本資料の閲覧にあたつては、宮澤千尋氏の助力を得た。記して氏の學恩に感謝した。
- (36) Hoàng Văn Đạo, *sûd. tr.* 25-26.
- (37) プルティラインドンナ保衛局は、同年一月頃、同派の結黨が決定されたといふ。Marty, *op. cit.*, p.7.
- (38) Procès verbaux d'interrogatoire HOANG VAN TUNG, ANOM, GGI/65536.
- (39) Notice de renseignements concernant M. Nguyen The Nghiep, Hanoi, 11 janvier 1944 (ANOM, RST-NF/6386) を參照。
- (40) Note de la direction de la Sûreté Générale Indochinoise au sujet du mouvement nationaliste annamite à l'extérieur, p.19, ANOM GGI/65444.
- (41) Déclarations de Nguyen The Nghiep, pp.4-5, ANOM, GGI/65444.
- (42) *Ibid.* p.11.
- (43) Déclarations de Dao Chu Khai, ANOM/GGI/65444
- (44) Hoàng Văn Đạo, *sûd. tr.* 183-5.
- (45) Note de la direction de la Sûreté Générale Indochinoise au sujet du mouvement nationaliste annamite à

- l'extérieur, ANOM, GGI/65444.
- (46) 「文持については、前掲拙稿「デオヴァンチとその周邊——シンンチャウタイ・タイ族領主層と清佛戦争」を参照。
- (47) En écoutant parler Deo-Van-Khuyh, ANOM, GGI/65444.
- (48) Le Faillier, Philippe, *La rivière noire: l'intégration d'une marche frontière au Vietnam*, PEFEO, Paris, 2010, pp. 229-231, à paraître.
- (49) Déclarations de Nguyen The Nghiep, p.22bis, ANOM, GGI/65444.
- (50) Procès-verbal d'interrogatoire de Nguyen Dinh Da, Viet Nam Quoc Dan Dang 1932-1933, ANOM, RST-NF/7013.
- (51) 『越南』國立暨南大學海外文化事業部印行、一九三六年八月一八三頁、及び、Note de la direction de la Sûreté Générale Indochinoise au sujet du mouvement nationaliste annamite à l'extérieur, ANOM, GGI/65444 248°。
- 令澤民は、ハザン省ウィスエン州の知州を父に持ち、一九一四年にはトンキン・雲南邊疆地區で活動していたヴェトナム光復會系の鄧子敏のグループに加わっていたと云う。
- Lettre par Hoang Nam Hung, mars 1933 à Ho Hoc Lam (ANOM, SPCE/357).
- (52) 潘佩珠は、一九二四年、ヴェトナム人民族主義者范鴻泰によるメルラン總督暗殺未遂事件、いわゆる沙面事件が起
- こると、ただちに廣州に入ったが、廣州での活動にあたっては謝英伯の援助を得たという（蔣永敬「胡志明在中國」傳記文學出版社、臺北、一九七二年、五七頁、註一三）。
- (53) フランスは滿洲事變以降、中國側に好意的な態度を示し、對日政策に影響を与えない範圍で中國側に援助を与えたことから、フランスの對獨敗北以前、中國國民黨はヴェトナムの獨立運動に對して公然たる支援は行わなかったとされる（羅敏「抗戰時期中國國民黨與越南獨立運動關係研究」『近代中國與世界——第二屆近代中國與世界學術討論會論文集』社科文獻出版社、二〇〇五年）。しかし、こうした事例は、黃埔軍官學校のネットワークなどをつうじ、國民黨黨部による支援が行われていたことをよく示している。
- (54) Hoàng Văn Dao, *sdd*, tr. 199.
- (55) 「中國國民黨二全大會海外黨務決議案」（一九二六年一月九日）、『革命文獻』七六輯、四四〇四五頁。蔣永敬（細井和彦譯）「孫中山と潘佩珠」（一九九〇年國際學術討論會報告集『孫文と東アジヤ』汲古書院、一九九三年。
- (56) Note de la direction de la Sûreté Générale Indochinoise au sujet du mouvement nationaliste annamite à l'extérieur, ANOM, GGI/65444.
- (57) Déclarations de Nguyen The Nghiep, p.23, ANOM, GGI/65444.
- (58) Déclarations de Nguyen The Nghiep, p.69, ANOM, GGI/65444.
- (59) Hoàng Văn Dao, *sdd*, tr. 202.

- (60) 黄文歡前掲書、八二頁。
- (61) Le 'Viet Nam Quoc Dan Dang' ou Parti National Annamite des EMIGRES en Chine (1933 a 1937), pp.13-14, ANOM, GGI/65444.
- (62) Werner, Jayne Susan, *The Cao Dai: The Politics of a Vietnamese Syncretic Religious Movement*, Cornell University, Ph. D, 1976, p.196. サヘルナーは「一九三八年」の組織が「ヴェトナム復國同盟會」に改稱されたとしている。復國同盟會については、白石昌也「ヴェトナム復國同盟會と一九四〇年復國軍蜂起について」『アジア經濟』二三卷四號、一九八二年を参照。
- (63) Note sur l'activité de la Section Centrale du 'Viet Nam Quoc Dan Dang' (Parti Nationaliste Annamite) au Yunnan, 15 Mars 1936-15 Mars 1937, p.1. ANOM, GGI/65444.
- (64) これに先んじ、阮世業が雲南府に投獄されている間、武進侶・陳玉俊らによつてクオック・グーによる隔週刊の『國魂』月刊の『新民雜誌』が刊行されたことが (Déclarations de Nguyen The Nghiep, p.34, ANOM, GGI/65444.)⁷ 詳細は不明である。
- (65) Déclarations de Nguyen The Nghiep, Index, p.24, ANOM, GGI/65444.
- (66) Note sur l'activité de la Section Centrale du 'Viet Nam Quoc Dan Dang' (Parti Nationaliste Annamite) au Yunnan, 15 Mars 1936-15 Mars 1937, p.7, ANOM, GGI/65444.
- (67) 黄文歡前掲書、六九頁。
- (68) 古田元夫前掲『ヴェトナム人共產主義者の民族政策史』一四〇〜一四五頁。
- (69) Le Tung Son, *sđđ* tr. 16.
- (70) Le 'Viet Nam Quoc Dan Dang' ou Parti National Annamite des émigrés en Chine (1933 a 1937), p.15, ANOM, GGI/65444.
- (71) Déclarations de Nguyen The Nghiep, Index, p.7, ANOM, GGI/65444.
- (72) Trinh Van Thao, *L'école française en Indochine*, Éditions KARTHALA, Paris, 1995, p.133.
- (73) 武進侶について、 (Déclarations de Nguyen The Nghiep, Index, p.13, ANOM, GGI/65444, 34-35, Trinh Van Thao, *op. cit.*, pp.205-207.
- (74) 陳玉俊は「一九四五年」に「ハートマン」を帰國し、ハートマンの『救國報』の主筆となったと云ふ (Hoàng Văn Đảo, *sđđ* tr.188.)⁸

**THE VIETNAMESE NATIONALIST PARTY AND YUNNAN:
THE YUNNAN -HAIPHONG RAILWAY AND
TRANSBORDER NATIONALISM**

TAKEUCHI Fusaji

The Yunnan-Haiphong Railway that ran between Kunming in Yunnan and Haiphong in Vietnam was completed in 1910. The railway was the major means of transport for the tin produced at Gejiu in Yunnan and played a vital role as an economic artery linking Yunnan and French Indochina. Landlocked Yunnan was closely linked to the maritime regions through the Yunnan-Haiphong Railway, which brought about an expansion in material, information and human exchange. At the same time, the opening of the railway was a turning point for the newly formed Vietnamese community of railway and related workers who resided in Yunnan.

This community played a role in supporting the nationalists who had been forced to flee from Indochina. Particularly after the uprising in Yenbay, Vietnam was suppressed in 1930, many members of the Vietnamese National Party escaped to Yunnan and there they formed the First Yunnan Provincial Chapter of the Vietnamese Nationalist Party with the aim of independence for their homeland.

In regard to the Vietnamese independence movement, the main focus of previous studies have centered around Ho Chi Minh and on the activities on Vietnamese in Siam and in Guangdong during the 1920s and 1930s, and Yunnan has not received sufficient scholarly attention. Through an analysis of the documents of the Sûreté of the French Indochinese government, I have made clear the fact that the Vietnamese Nationalist Party that was active in advancing the independence movement in Yunnan played an important role in the independence movement of the Vietnamese in China in the 1930s and that the members were part of the new generation of Vietnamese intellectuals who had received their education under the Quoc-Ngu system and not the traditional Confucian one.